刑務星

灰兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
刑務星

【Ｎコード】
Ｎ５１２４ＢＡ

【作者名】
灰兎

【あらすじ】
遠い未来のお話。ある若い男が罪を犯し、裁判所に立つことになった。※フィクションです

「以上、罪状に関して何か間違いはありますか。」
「ございません。」
裁判長の目を静かに見上げて、被告人である若い男が告げた。
「私は確かに、犯罪者管理データへの不正アクセスを行いました。これは消せようもない罪です。」
目的はとある裁判内容について、詳しく調べたかったのだ。若者の恋人は、有罪判決を受けた。見覚えのない罪で。
彼女は、地球政府高官の秘書をしていた。しかし、その高官が犯した不正の身代わりとして、罪を擦り付けられたのである。彼女を冤罪から救おうとしたが、弁護士も警察も動いてはくれなかった。だから、自分にしか彼女は救えない。たとえ、法に触れるとわかっていても。
「しかし、その過程で、重要な政府の機密を知ってしまいました。今日は、その事も法廷で証言する事で、明らかにしたいのです。あ……あのような過酷な環境から、一秒でも早く。」
知り得た驚愕の情報を思い出すだけで血の気が引いていく。もしも鏡があれば、真っ青な自分の顔が映るだろう。
しかし、その時、見慣れた彼女の姿がふと浮かんだ。緑の草で覆われた、小高い丘の上。柔らかそうな白い腕で、日傘を差している。甘い蜜のような色をした金髪が、春風にたなびいていた。名前を、呼ぶ。爽やかな笑みを浮かべて振り返ってくれた。青空の下、穏やかな思い出の一瞬。
奪われた彼女の幸せを、取り戻さなくてはならない。
喝を入れるかのように、歯を食いしばった。顔を上げ、中央を見据える。
そして、毅然とした態度で、告げた。
「罪のない彼女を、あの『刑務星』から救いたい。」

背後の傍聴席の人間達が、互いに顔を寄せ合って声を漏らさずに囁き始めた。
「今までは、終身刑を受けた者たちは、しかるべき刑務所にいって刑務を受けていると誰もが思っていました。しかし、現実は異なっていたのです。かれらは全て、違う惑星に送られていたのでした。」
この頃、地球の人口過密度は大きくなり、受刑者を収監できるスペースを惜しむ程になっていた。加えて、死刑制度も廃止された。それゆえに、地球上の受刑者は、別の異なる惑星へと送られていたのである。
「刑務星の環境は苛酷です。地軸の傾きが地球とは異なる為、全域に熱帯の密林が茂っています。植物の受粉を助ける虫の種類も様々。大きさも人より数十倍にもなるものもいます。肉食の種も当然います。いや、小さい種の方が危険かもしれません。大型種の捕食から逃れる為、必然的に体内に毒性を持つ種が多いのです。」
受刑者の生存確率は、ほぼ0パーセント、と若者は告げた。
「しかし、まれに、一年間、つまり八七六〇時間以上生存を続ける受刑者がいます。よって彼らだけは特別に『恩赦』が許され、二度と犯罪をしない事を条件に、地球へ帰還する事ができます。現在まで、再犯を犯したものはいません。」
刑務星の恐怖を味わった者ならば、それは当然の事であろう。
「その後、彼らは、主に他の移民星への間諜として使われます。政府が他星との星間戦争を回避できているのも、彼らの働きによる所が大きいのかもしれません。」
何故なら、間諜らは、死と隣り合わせの環境でも耐え抜く精神力、肉食植物の捕食から自己を守り抜く戦闘能力、現在の環境から生存確率を高める為の情報収集力とそれを生かす知力、他者の協力が必要な際に、様々な言語や文化圏を持つ他の受刑者達を動かすコミュニケーション力に、交渉力、他にもあらゆる要素において、ずば抜けた能力を保有しているからだ。

「私はヒューマニストではありませんが、地球内に死刑反対の民意があるとはいえ、このよう非人道的な刑務を執行されるのは、いかがなものかと思うのです。さらに、元犯罪者を間諜として使用なさるのも。確かに、一般人を幼児の頃から英才教育を施したとしても、死の恐怖から生き延びた彼らのレベルに匹敵する人材を育てるのは、難しいでしょう。しかし、仮に、そのような卓越した人材が政府を裏切った場合、危険が伴います。」

裁判官は、睨みつけるように若者を見ていた。一方、左右の弁護士や検事、背後の傍聴席に座る一般人達は動揺し続けている。やはり、裁判所の高官には、周知の機密だったらしい。

明日には、マスコミ達が声高に騒ぎ立てるだろう。罪を裁く為の、証言の場においての暴露。なるほど、さすがは、進入不可能とされている機密に潜り込んだだけの事はある。　全てがさらされるのが時間の問題ならば、褒美として教えてやるのも悪くはない。裁判官は、思った。

「彼らは、政府から高額な給料と待遇を得ています。自ら贅沢な暮らしを放棄する者が、何処にいるというのです。それに、『刑務星』の機密が世間にばれたとしても、あなたが考えるほど問題はありません。この制度が、他星との外交に陰ながら役立っていると知れば、納得するでしょう。あなたが、糾弾したい事は、糾弾されうるべき事柄ではないのです。」

いえ、と若者は、裁判官の言葉を否定した。

「この場で糾弾したいのは、刑務星の制度自体ではなく、自分達に都合の悪いものを民の前から消し、都合の良いものだけを保護している政府の腐敗した姿です。あなた方は、重要な役職に着く高官の不正を庇う為に、年若い者を身代わりにする事を許しました。私が、今回の罪を犯したのも、厳正なる法廷の場で、その事を糾弾したいが為だったのです。」

裁判官達全てが、顔をしかめ始めた。この時に、若者は、裁判所もあの高官や政府と同じだったのだ、と気がついた。中立公正であ

るべき最後の砦は、とうに崩れてしまっていたのだ。腐りゆく銅管には、漏水を止められない。もはや、この星には、破裂の時が静かに待ち続けているだけだ。

判決を下す、と裁判官が厳かに告げた。

「有罪に処す。罪状は――――」

その時、何処からかピュン、と風を切るような音が聞こえた。

次の瞬間、中央の裁判官が後ろへ倒れ落ちた。何事かと、周囲の人間が駆け寄ってくる。覗き込むと、額を正面から弾丸で撃ち抜かれていた。まるで、最初から錐(きり)で開けられていたのでは、と思うほど完璧に。

若者も、自分の前で起こった出来事に対して戦慄した。しかし、後ろを振り向いた時に、自分の両目がある一人を捕らえた。騒然とする法廷から、そっと早足で去っていくその後姿を。見慣れた色の髪を、たなびかせながら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5124ba/

刑務星

2012年1月14日03時48分発行